別添資料１

孤立ゼロプロジェクト
足立区の高齢者孤立死データ分析結果

絆づくり担当課

【データ出典】

① 東京都監察医務院提供データ（平成３０年～令和７年）　（全ページ）

② 気象庁「過去の気象データ検索」　（Ｐ９、１２、１３）

③東京都監察医務院「令和２～７年夏の熱中症死亡者数の状況【東京都23区（確定値）】　（Ｐ１０、１１）

※　孤立ゼロプロジェクトとは

　地域における日常的な見守りや声かけ活動を通して、支援を必要とする方を早期に発見し、必要なサービスにつなぎ、地域活動などへの社会参加を促す一連の活動をいいます。

　このような活動を通した地域住民やボランティアなど、関係者とのつながりを『絆のあんしんネットワーク』といいます。

■■■　目次　■■■

1　この分析について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（P　3）

2　集計・分析結果

（1）「3 年月別の集計」「4 時期別の集計」の集計・分析・対応など・（P　4）

（2）「5 性別・年齢別の集計」の集計・分析・対応など ・・・・・・・・（P　5）

（3）集計・分析結果に基づく対応方針と具体的対策①・・・・・・・・・・（P　6）

（4）集計・分析結果に基づく対応方針と具体的対策②・・・・・・・・・・（P　7）

3　年月別の集計

（1）暦年別高齢者孤立死者数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（P　8）

（2）月別高齢者孤立死者数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（P　9）

4　時期別の集計

（1）夏季（7・8月）の高齢者孤立死者数・・・・・・・・・・・・・・・・（P10）

（2）東京23区内全域の熱中症死亡者数①・・・・・・・・・・・・・・・・（P11）

（3）東京23区内全域の熱中症死亡者数②・・・・・・・・・・・・・・・・（P12）

（4）冬季（1～3・12月）の高齢者孤立死者数①・・・・・・・・・・・・（P13）

（5）冬季（1～3・12月）の高齢者孤立死者数②・・・・・・・・・・・・（P14）

（6）死亡直前の状況別高齢者孤立死者数・・・・・・・・・・・・・・・・（P15）

5　性別・年齢別の集計

（1）性別による傾向（割合及び死後経過日数の比較）・・・・・・・・・・（P16）

（2）性別による傾向（死後経過日数と発見者の比較）・・・・・・・・・・（P17）

（3）死亡年齢と死後経過日数の比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・（P18）

1　この分析について

（1）この分析について

東京都２３区内で発生したすべての不自然死（死因不明の急性死や事故死など）について、遺体の検案及び解剖を行い、その死因を明らかにしている東京都監察医務院より足立区内に関するデータの提供を受け、足立区が独自に分析しています。

（2）検案対象

ア　病死及び自然死の一部

（ア）医師の診療を受けずに死亡した場合

（イ）医師の診療を受けたが死因不明のまま死亡した場合

（ウ）医師の診療中の病気と違った他の原因で死亡した場合

（エ）発病又は死亡時の状況に異状がある場合

イ　すべての外因死とその後遺症による死亡

不慮の外因死(交通事故死、転落死、溺死、焼死など)、自殺、他殺

ウ　不詳の外因死か不明のもの

（3）孤立死分析の目的

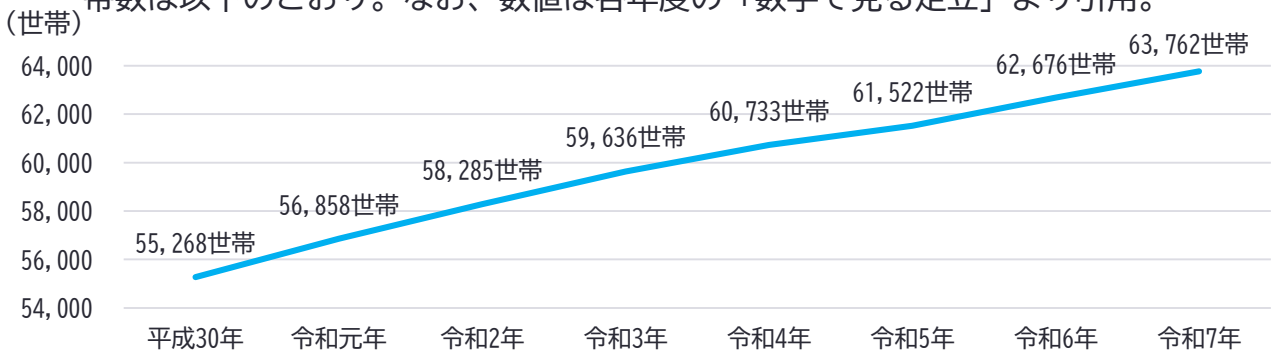
大きく分けて以下の二つの目的があります。

ア　孤立死の危険性がある条件や現状を知ることで、孤立死を防ぐための必要な知識を絆のあんしんネットワーク関係者間で共有し、見守り対象者への情報提供を通じ、日頃からの交流等につなげてもらうため。

イ　孤立しているかどうかは対象者の主観によるものであり、高齢者孤立死した方の生前のつながり等を客観的に分析することにより、孤立ゼロプロジェクトの成果を確認するため。

（4）分析期間の単身世帯数について

分析期間（平成３０年～令和７年）それぞれの年度における６５歳以上の単身世帯数は以下のとおり。なお、数値は各年度の「数字で見る足立」より引用。



「不自然死」とは「死因不明の急性死や事故死など」を指し、本分析では「足立区内の６５歳以上の単身者の自宅での不自然死」を「高齢者孤立死」と定義します。

２　集計・分析結果
（１）「３ 年月別の集計」「４ 時期別の集計」の集計・分析・対応など

	集計結果	分析・対応など
内容	**３　年月別の集計**	
	ア　令和７年の高齢者孤立死者数 Ｐ８、９ 分析開始以降最多だった令和６年より減少したが、分析開始以降３番目に多かった。	**ア　令和７年の高齢者孤立死者数** （ア）令和６年と比較して猛暑日が６日多かったが、猛暑日観測日の高齢者孤立死者数は微減となった。 （イ）夏季よりも冬季１～３、１２月の高齢者孤立死者数は依然として高い傾向が続いている。
	４　時期別の集計	
	イ　夏季（７・８月）及び冬季（１～３・１２月）の高齢者孤立死者数 Ｐ１０、１３、１４ （ア）夏季は最高気温が３５℃（猛暑日）を上回ると２.１倍になった。 （イ）冬季は１日の最高気温と最低気温の差が１２℃を上回ると１.２倍。また、最低気温が４℃以下になると１．３倍になった。	**イ　夏季・冬季の高齢者孤立死の傾向について** 夏季は最高気温、冬季は１日の気温差と最低気温とに関連があり、令和元年の分析開始から同様の傾向である。
	ウ　状況別の高齢者孤立死について Ｐ１１、１２、１５ （ア）就寝中は１、２、８、１２月に、入浴中は１～３、１２月に高齢者孤立死件数が増加している。 （イ）東京２３区の熱中症死亡者（令和２～７年の６～９月）で、エアコンの設置があった８１９人のうち、８１.２%が使用していなかった。	**ウ　状況別の高齢者孤立死について** （ア）エアコンが設置されていても夏場に使用していなかった割合は、令和６年よりも４.４%減少した。 （イ）国や都、区の啓発効果によりエアコンの使用率が上昇したと思われるが、依然として死亡者の８割以上が未使用であるため、適切なエアコン使用を含めた熱中症予防啓発の継続が必要である。 （ウ）冬季の入浴中の死亡者数が多いことから、ヒートショック予防啓発にも注力していく必要がある。

2　集計・分析結果
（2）「5 性別・年齢別の集計」の集計・分析・対応など

	集計結果	分析・対応など
内容	5　性別・年齢別の集計	
	ア　性別による傾向 Ｐ１６・１８ （ア）高齢者孤立死者数は、男性の方が多い傾向は変わらない。 （イ）女性は死後３日以内に発見される方が６．５割だが、男性は４割に留まっている。	**ア　男性の高齢者孤立死・経過日数について** （ア）高齢者孤立死者数は女性の２．２倍の２８１人 （イ）発見までに要した平均経過日数は、女性の１．７倍の１４．６日 （ウ）過去の集計結果と比較しても同様の傾向にある。
	イ　発見者の比較 Ｐ１７ 男性、女性ともに家族親族による発見割合が高い。	**イ　発見者の割合について** （ア）死後７日以内までは、男性、女性ともに「家族親族」及び「保健福祉関係者」による発見割合が高い。 （イ）日数が経過するほど「家族親族」による発見が少なくなり、「隣人」による発見が多くなる。 （ウ）高齢者の異変に早期に気づき、地域包括支援センターにつながるよう、より多くの区民や協力員などに孤立のサインや気づきのポイントを周知していく。
	ウ　高齢者全体との死亡年齢の比較 Ｐ１８ 高齢者全体の死亡年齢の中央値と比較すると、高齢者孤立死した方は、男性で７．３歳、女性で５．５歳早く亡くなっている。	**ウ　高齢者孤立死した方の早逝要因について** 単身高齢者は、生活習慣の乱れや体調悪化時の緊急時の対応ができないことなどが要因として考えられる。

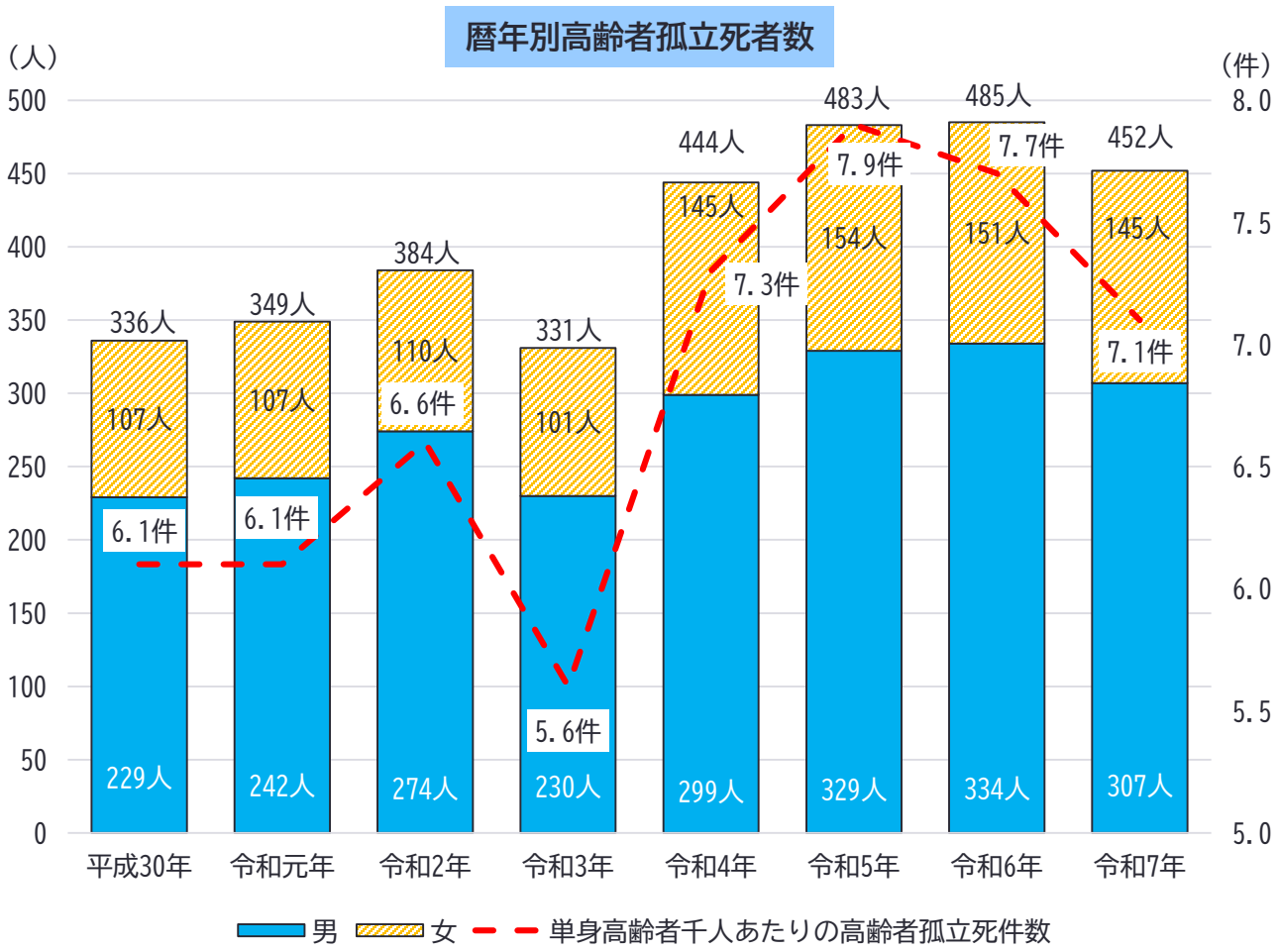
2　集計・分析結果
（3）集計・分析結果に基づく対応方針と具体的対策①

	対応方針	具体的対策
内容	**ア　熱中症対策** エアコン未使用率は低下してきているが、依然として８割を超えており、継続した熱中症予防啓発が必要である。	**ア　熱中症対策** （ア）あだち広報に加え、公式ＬＩＮＥ、Ａメール、ＳＮＳなどによる熱中症予防啓発を行う。【新規】 （イ）エアコンの適切な使用による温湿度管理の呼びかけを行う。【継続】 （ウ）「冷たい風が嫌い」「暑いと感じない」「電気代がもったいない」等の理由でエアコンの使用に至らない場合は、温湿度計の配付による適切な温湿度管理の呼びかけを行う。【継続】 （エ）絆づくり通信（夏発行）や熱中症予防啓発チラシを、区施設や各駅の情報スタンド等へ配架し、広く区民に周知啓発していく。【継続】
	イ　ヒートショック対策 夏季の「熱中症」よりも冬季の「ヒートショック」と思われる高齢者孤立死者数が多いことから、今後はヒートショック予防啓発にも注力していく。	**イ　ヒートショック対策** （ア）ヒートショック予防啓発チラシを、区施設や各駅の情報スタンド等へ配架し、広く区民に周知啓発していく。【新規】 （イ）あだち広報、公式ＬＩＮＥ、Ａメール、ＳＮＳなどによるヒートショック予防啓発を行う。【新規】 （ウ）令和７年度からヒートショック対策の注意喚起メッセージ入りのタオルを作成。【継続】 （エ）実態調査やわがまちの孤立ゼロプジェクトを実施する町会・自治会にタオルを提供する。また、タオルに記す注意喚起メッセージ内容や配付方法を工夫していく。【拡充】 （オ）絆づくり通信（冬発行）を、区施設や各駅の情報スタンド等へ配架し、広く区民に周知啓発していく。【継続】

２　集計・分析結果
（４）集計・分析結果に基づく対応方針と具体的対策②

	対応方針	具体的対策
内容	**ウ　男性の孤立対策** 分析開始以来、高齢者孤立死者数、死後経過日数が長期になる方ともに男性の割合が多く、主に男性に向けた孤立対策に注力していく。	**ウ　男性の孤立対策** （ア）就労中の現役世代から地域活動に参加するなど、地域との接点を築いておくことの大切さを啓発していく。【継続】 （イ）男性が多く就労する運送業者、警備会社に加え、清掃事業者やバス、タクシーなどの旅客運送事業者も新たな対象として啓発を広げていく。【拡充】

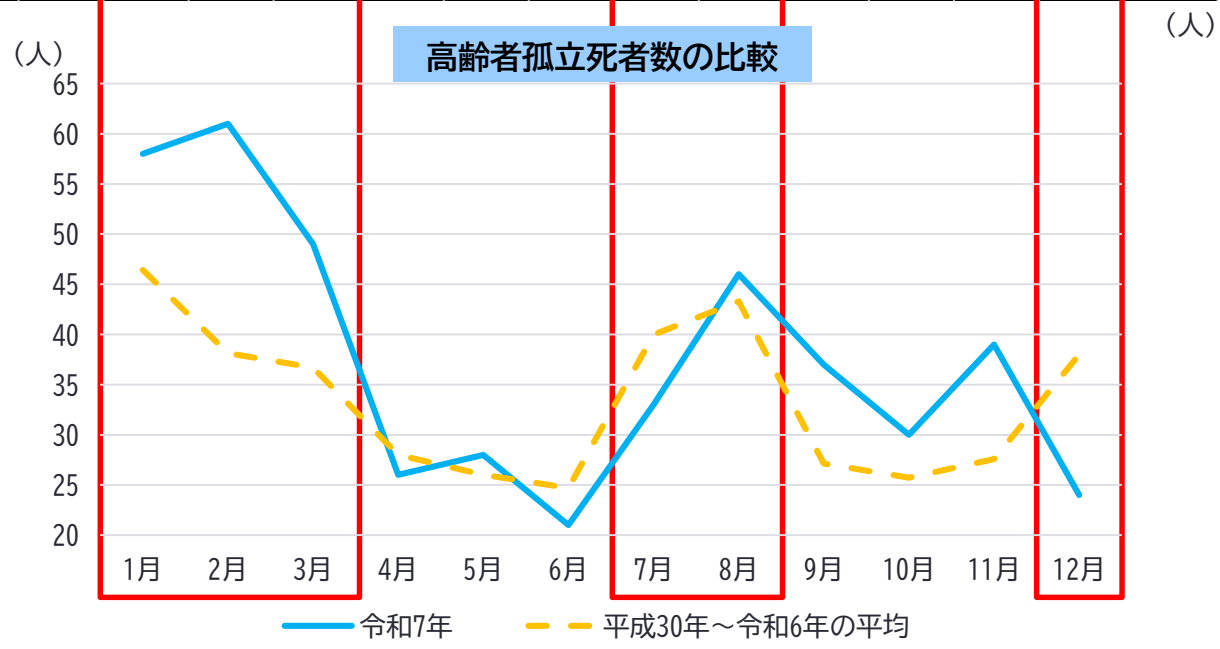
3　年月別の集計
（１）暦年別高齢者孤立死者数



１　男性が約７割、女性が約３割の比率で高齢者孤立死が発生している傾向は**変わらない**。
２　令和７年は男女ともに令和６年から減少した。
３　単身高齢者千人あたりの高齢者孤立死件数は、令和４年以降は７件を超えており、高い水準で推移している。

3　年月別の集計
（2）　月別高齢者孤立死者数

年月		各月												合計
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
暦年	平成30年	50	33	19	10	24	18	55	27	18	26	23	33	336
	令和1年	51	28	31	27	20	16	33	58	13	18	25	29	349
	令和2年	34	38	34	33	23	21	20	59	32	25	25	40	384
	令和3年	37	35	19	35	19	19	27	35	26	20	27	32	331
	令和4年	51	51	61	23	30	24	34	43	29	23	32	43	444
	令和5年	59	42	39	36	33	40	55	39	41	37	26	36	483
	令和6年	43	40	54	32	33	35	56	42	31	31	35	53	485
	令和7年	58	61	49	26	28	21	33	46	37	30	39	24	452
合計		383	328	306	222	210	194	313	349	227	210	232	290	3,264
1000人当たり		116.4	98.8	94.9	67.9	67.1	60.3	91.7	103.2	70.2	61.8	73.4	94.3	1,000.0
H30～R7平均		47.9	41.0	38.3	27.8	26.3	24.3	39.1	43.6	28.4	26.3	29.0	36.3	408.0
H30～R6平均		46.4	38.1	36.7	28.0	26.0	24.7	40.0	43.3	27.1	25.7	27.6	38.0	401.7



1　令和７年の孤立死者数は、分析開始以降３番目に多い数値であるが、令和６年からは微減している。

2　夏季（7、８月）の孤立死者数について、例年と比較して７月の孤立死者数は減少したが、**８月は猛暑日観測日数が多かったため、孤立死者数は増加**した。

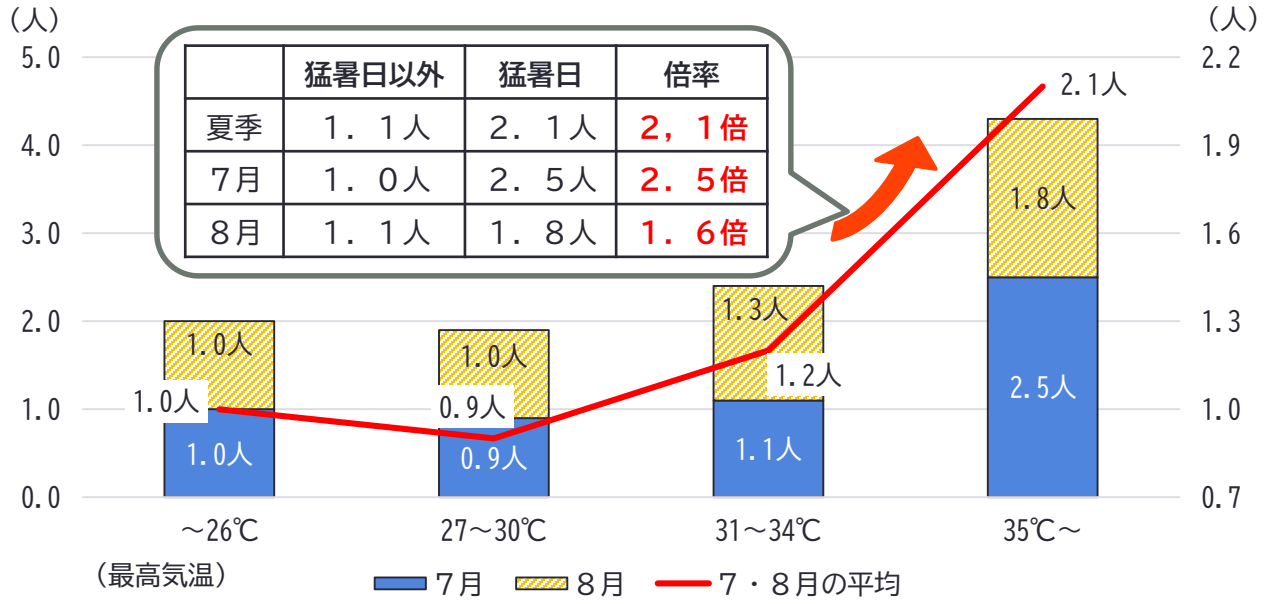
3　冬季（１～３、１２月）の孤立死者数は依然として**高い傾向**だった。

4　時期別の集計
（1）夏季（7・8月）の高齢者孤立死者数

最高気温別の平均高齢者孤立死者数／日（平成３０～令和７年累計）

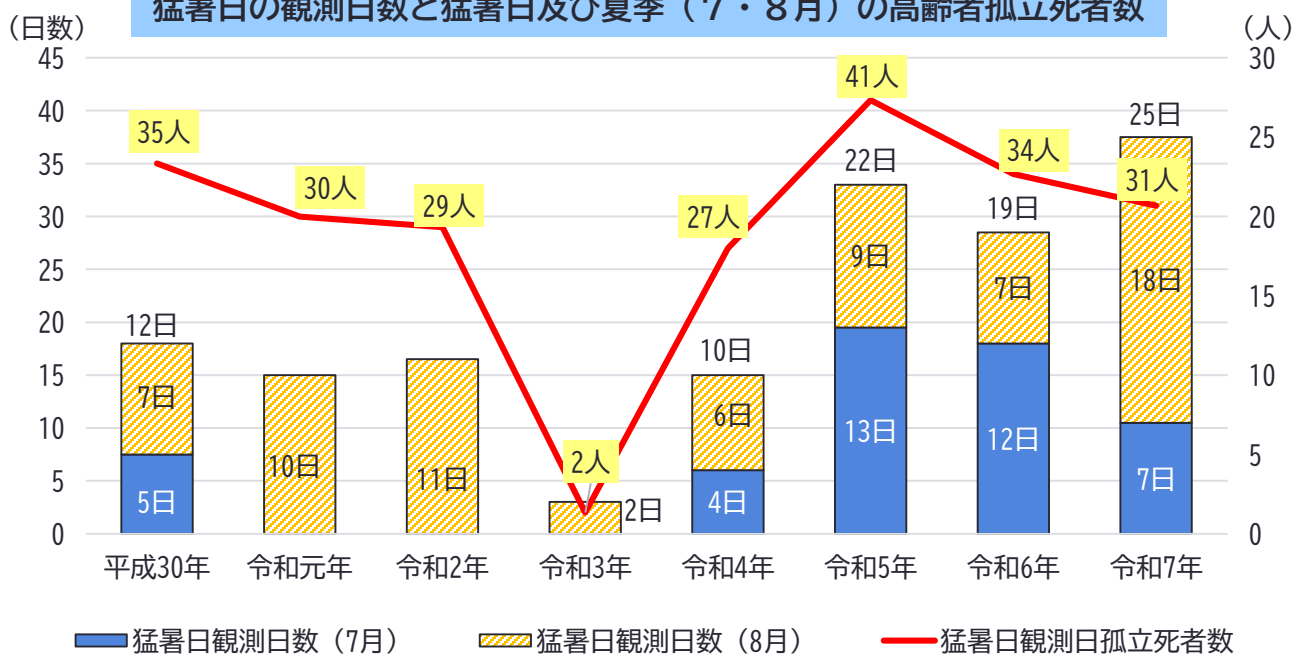
※　猛暑日＝最高気温が３５℃以上の日

	猛暑日以外	猛暑日	倍率
夏季	１．１人	２．１人	２，１倍
７月	１．０人	２．５人	２．５倍
８月	１．１人	１．８人	１．６倍



1　猛暑日は、それ以外の日と比べて高齢者孤立死リスクが２．１倍に高まる。
2　７月の猛暑日は７月のそれ以外の日に比べるとリスクが２．５倍に高まる
（暑さに慣れず、暑熱順化対応ができていないことが原因と考えられる）。
3　８月の猛暑日は８月のそれ以外の日に比べるとリスクが１．６倍に高まる。

猛暑日の観測日数と猛暑日及び夏季（７・８月）の高齢者孤立死者数



1　猛暑日の観測日数の増加に伴い、高齢者孤立死者数自体も増加している。
2　令和７年の孤立死者数の減少は７月の猛暑日が減ったことが要因と思われる。

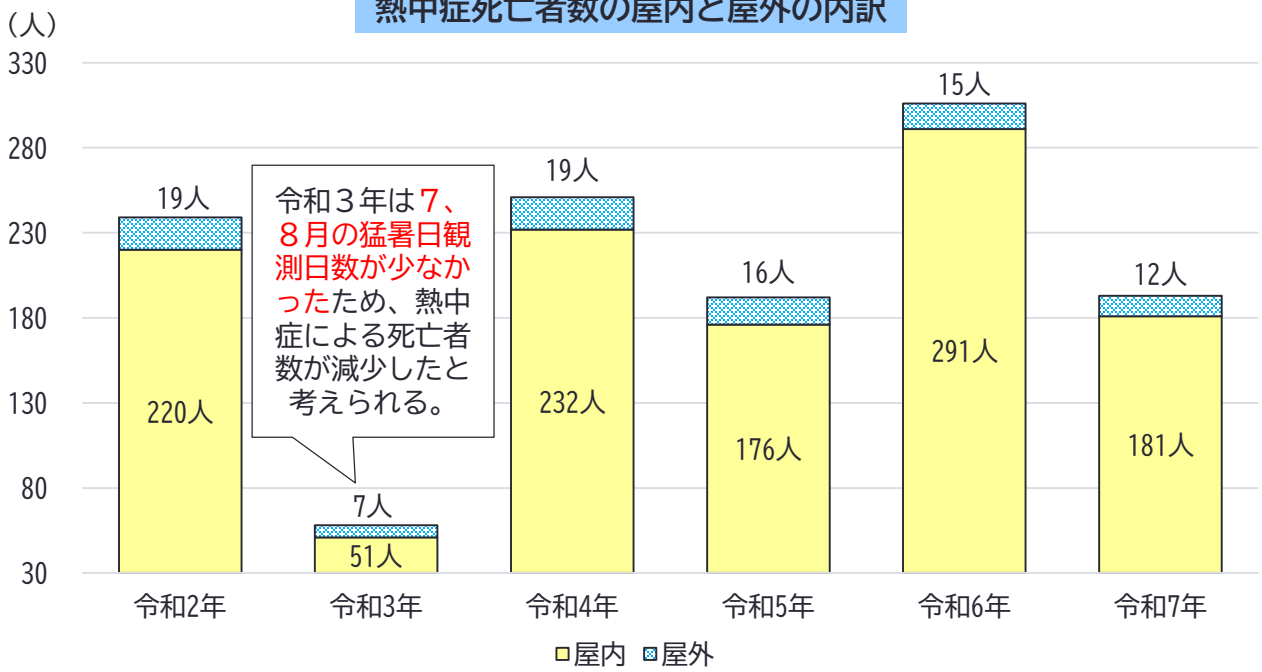
4　時期別の集計
（２）東京２３区内全域の熱中症死亡者数①

検案数から見た熱中症死亡者数の割合

東京２３区内全域（世帯構成・年齢不問）　（ｎ＝令和２～７年の６～９月累計）



熱中症死亡者数の屋内と屋外の内訳

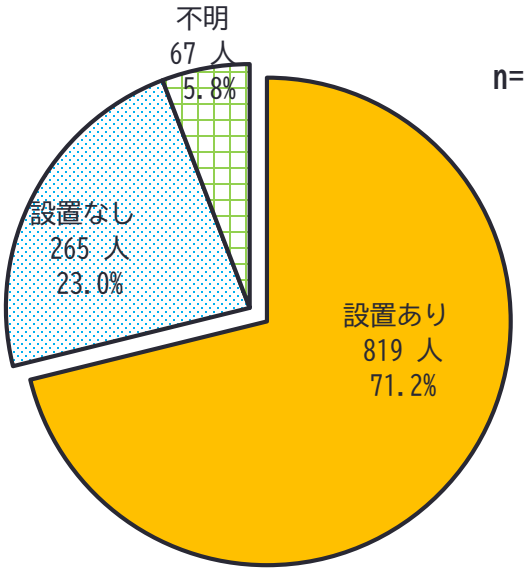


1　熱中症により死亡と判断される方は東京都監察医務院の検案数全体の**約４％**
2　東京都監察医務院が検案した熱中症死亡者数のうち、屋内での死亡は**９２．９％**

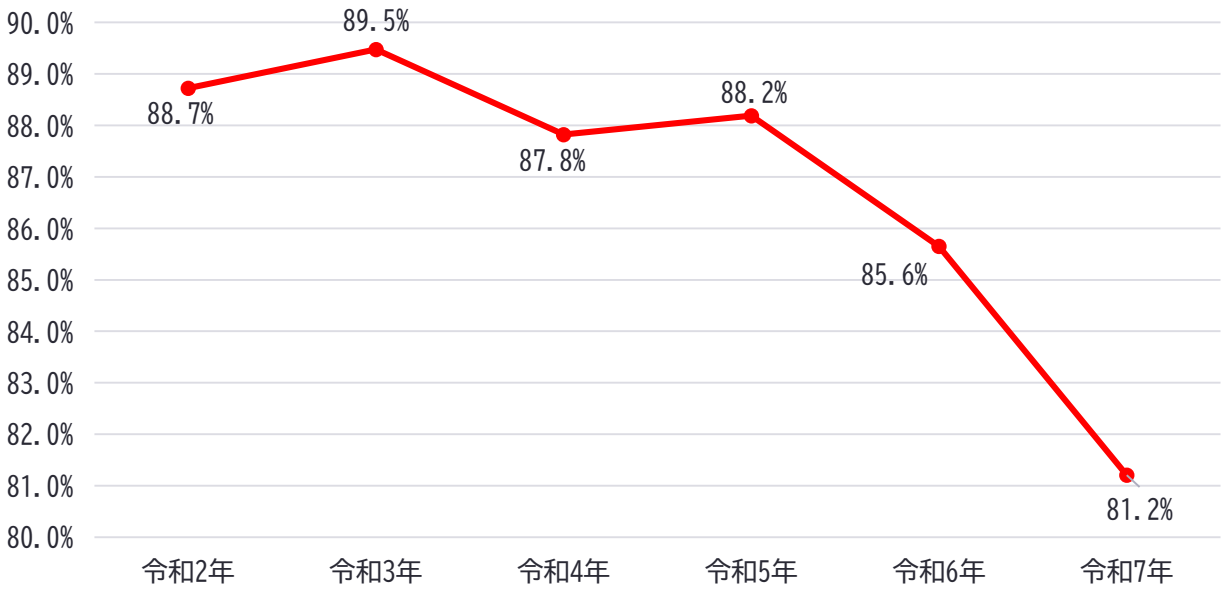
4　時期別の集計
（３）東京２３区内全域の熱中症死亡者数②

エアコン設置の有無

東京２３区内全域（世帯構成・年齢不問）　（ｎ＝令和２～７年の６～９月累計）



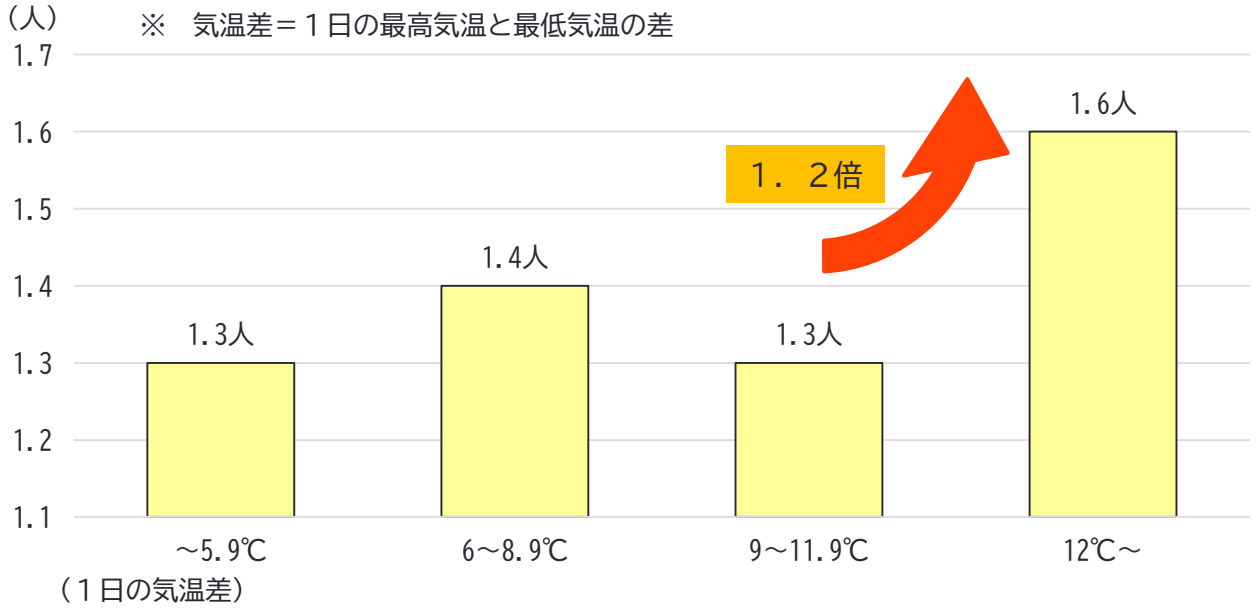
エアコン設置ありのうち未使用の割合



１　エアコンを設置していない、もしくは使用できるか不明の世帯は全体の**約３割**。
２　エアコンを設置していた８１９人の熱中症死亡者のうち、未使用者は**８１．２％**であった。
３　未使用率は低下の傾向にあるが、依然として**８割**を超えている。

4　時期別の集計
（4）冬季（1～3・12月）の高齢者孤立死者数①

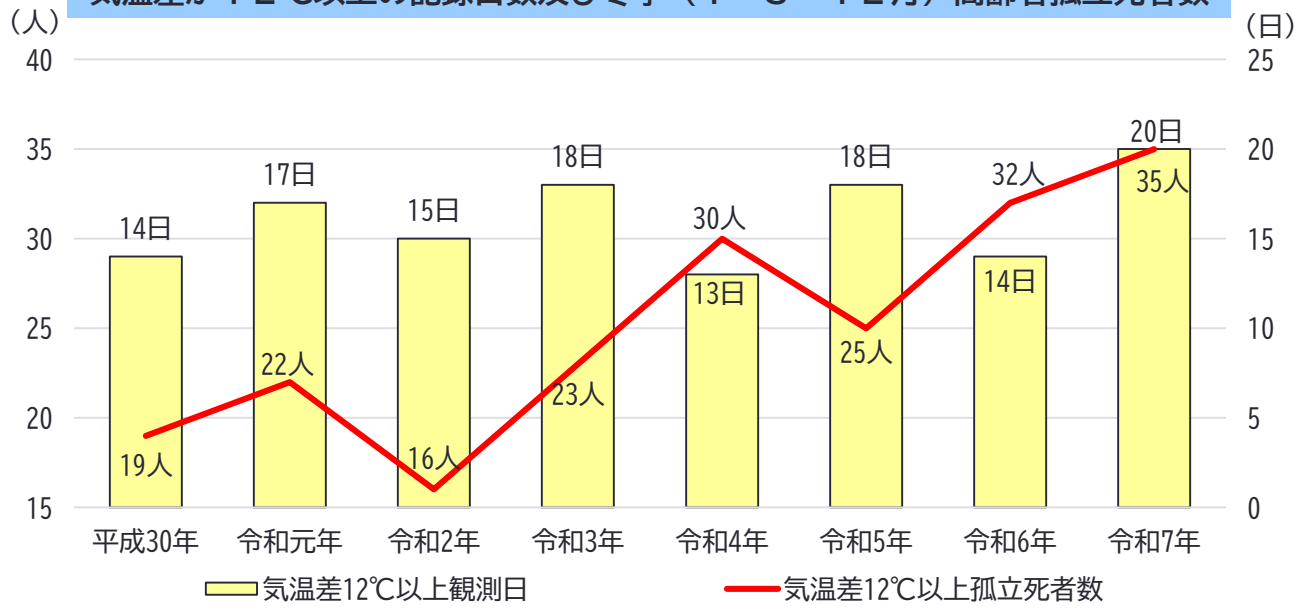
気温差別の平均高齢者孤立死者数／日（平成３０～令和７年の累計）



気温差１２℃未満の日は平均１．３人
気温差１２℃以上の日は平均１．６人

気温差１２℃未満と比較して
高齢者孤立死リスクは１．２倍

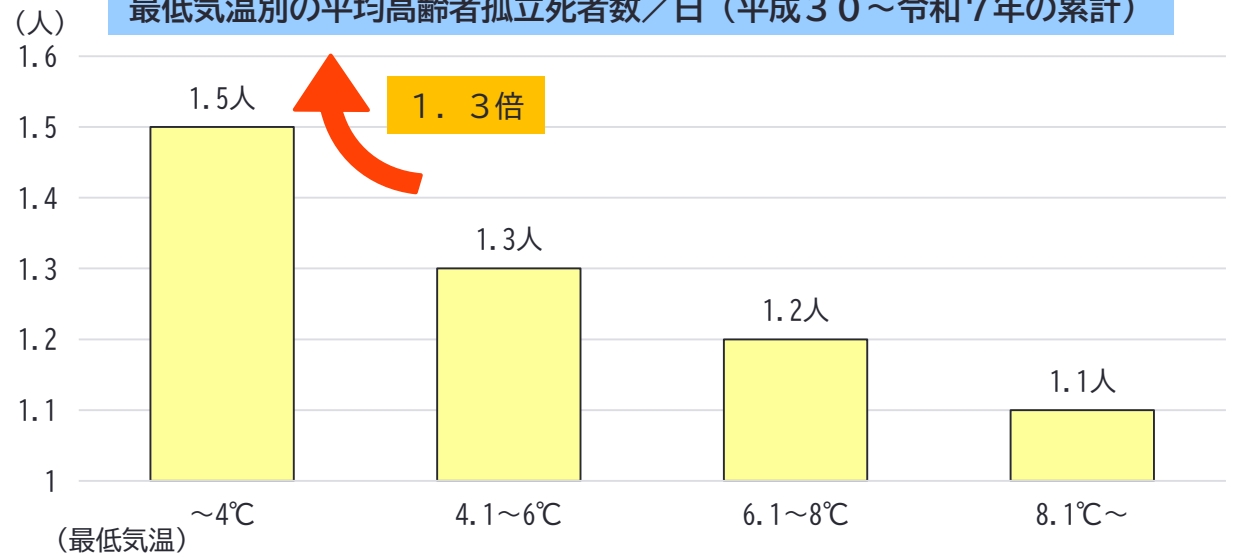
気温差が１２℃以上の記録日数及び冬季（１～３・１２月）高齢者孤立死者数



気温差が１２℃以上になると高齢者孤立死リスクが高くなるため、日頃から気象情報のチェックが大切である。

4　時期別の集計
（5）冬季（1～3・12月）の高齢者孤立死者数②

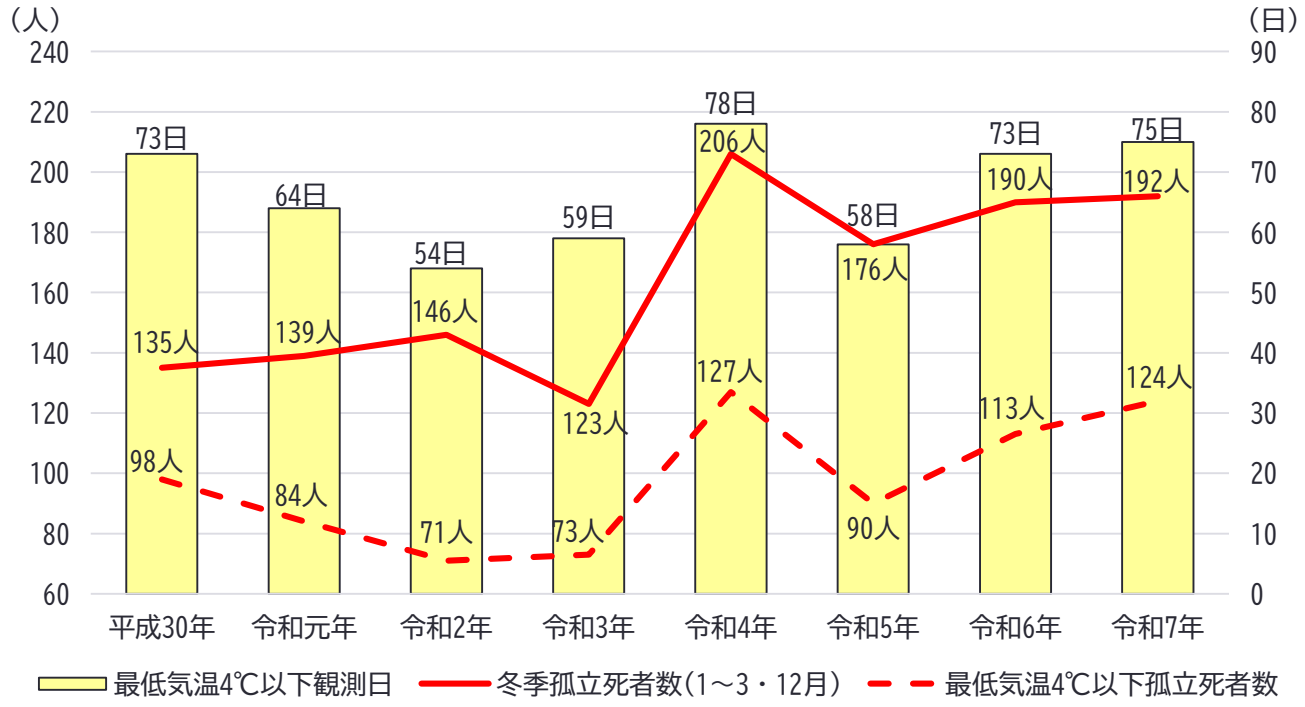
最低気温別の平均高齢者孤立死者数／日（平成３０～令和７年の累計）



最低気温が４℃より高い日は平均１．２人
最低気温が４℃より低い日は平均１．５人

最低気温が４℃より高い日と比較すると
高齢者孤立死リスクは１．３倍

冬季（１～３・１２月）の高齢者孤立死者数と、そのうち最低気温４℃以下の日の死者数



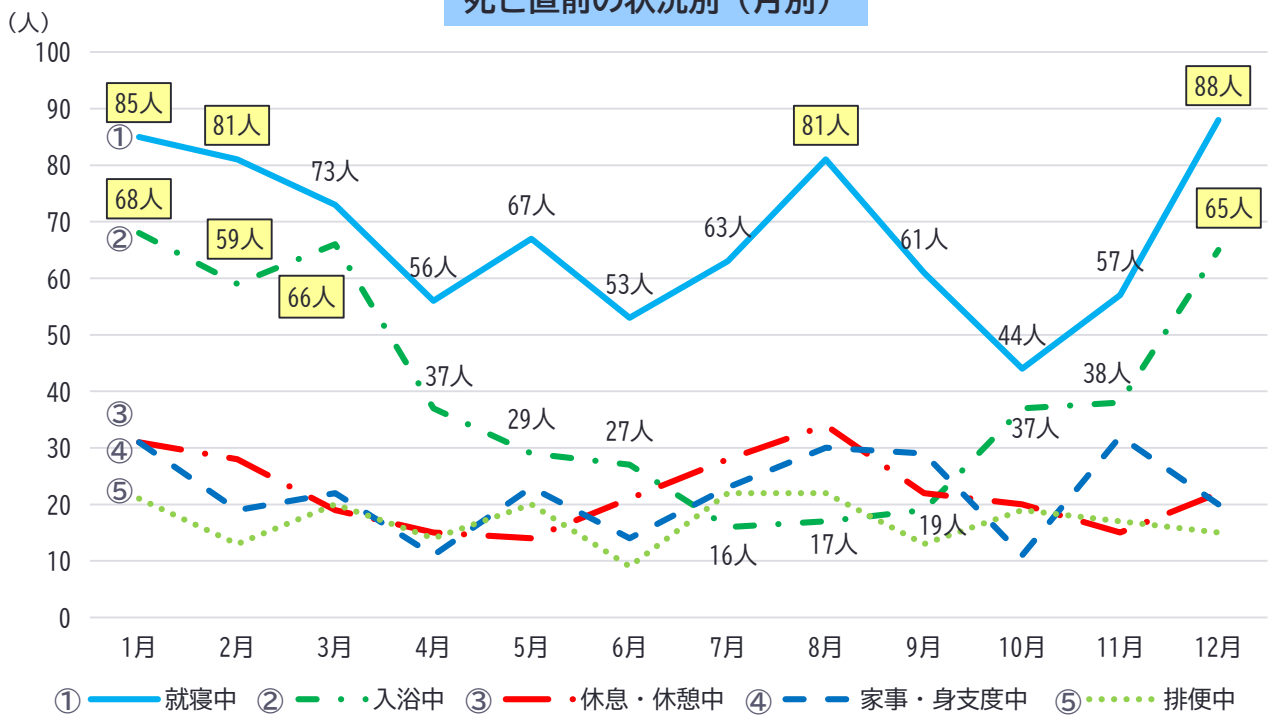
最低気温が４℃以下になると高齢者孤立死リスクが高くなるため、日頃から気象情報のチェックが大切である。また、気象情報のチェック以外にも次ページの状況別の対策も重要。

4　時期別の集計
（６）死亡直前の状況別高齢者孤立死者数

死亡直前の状況別（全体）（平成３０～令和７年の累計）

状況別	合計		男性		女性	
	孤立死者数	割合	孤立死者数	割合	孤立死者数	割合
就寝中	８０９	２１．２%	５７８	２２．０%	２３１	１９．４%
入浴中	４７８	１２．５%	２７９	１０．６%	１９９	１６．７%
休憩・休息中	２６９	７．０%	１８４	７．０%	８５	７．２%
家事・身支度中	２６５	７．０%	１６３	６．２%	１０２	８．６%
排便中	２０５	５．４%	１３８	５．３%	６７	５．７%
飲食中	３７	１．０%	１９	０．７%	１８	１．５%
寝たきり	１３	０．３%	３	０．１%	１０	０．８%
その他	５２０	１３．６%	３７６	１４．３%	１４４	１２．１%
不詳	１，２２０	３２．０%	８８７	３３．８%	３３３	２８．０%
合計	３，８１６	１００．０%	２，６２７	１００．０%	１，１８９	１００．０%

死亡直前の状況別（月別）

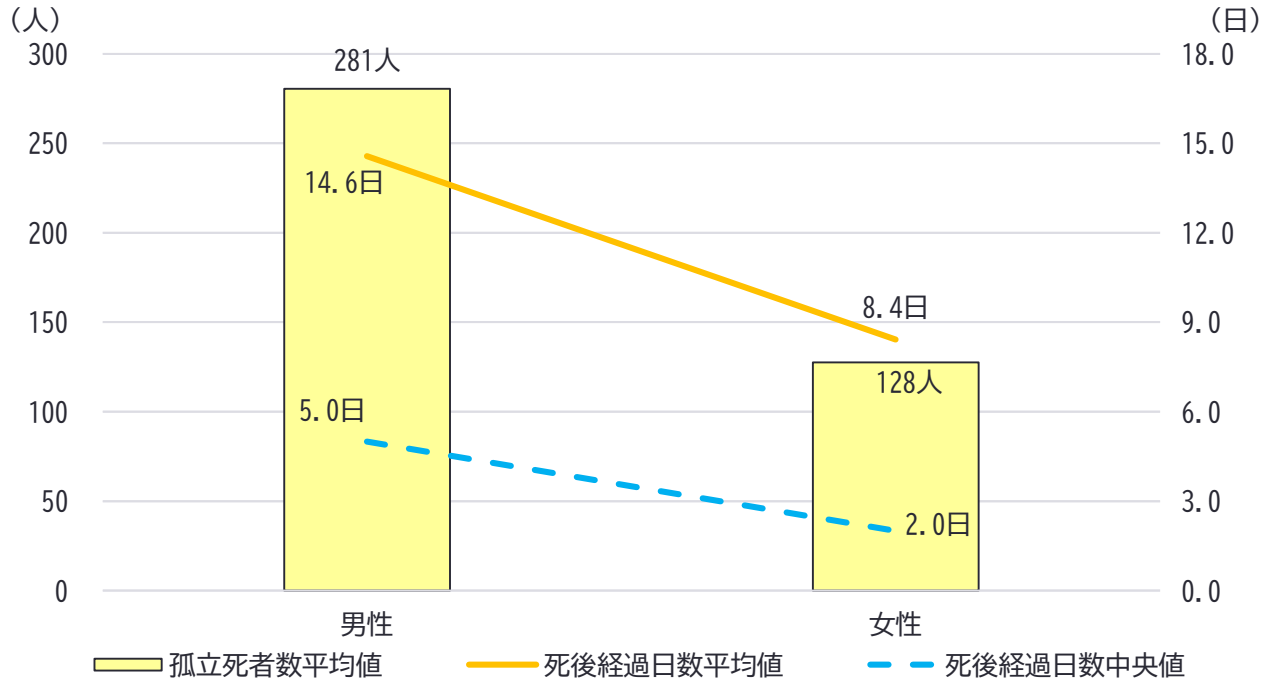


※　死亡直前の状況別（全体）高齢者孤立死者数上位５種（赤枠）を集計（その他、不詳を除く）

１　全体では男女ともに１年を通して①「就寝中」の孤立死者数が最も多く、特に夏季（８月）と冬季（１、１２月）に増加している。
２　「入浴中」は冬季（１～３、１２月）を中心に増加しており、夏季は最も少ない。

５　性別・年齢別の集計
（１）性別による傾向（割合及び死後経過日数の比較）

性別ごとの高齢者孤立死の件数及び死後経過日数の比較（平成３０～令和７年の累計）

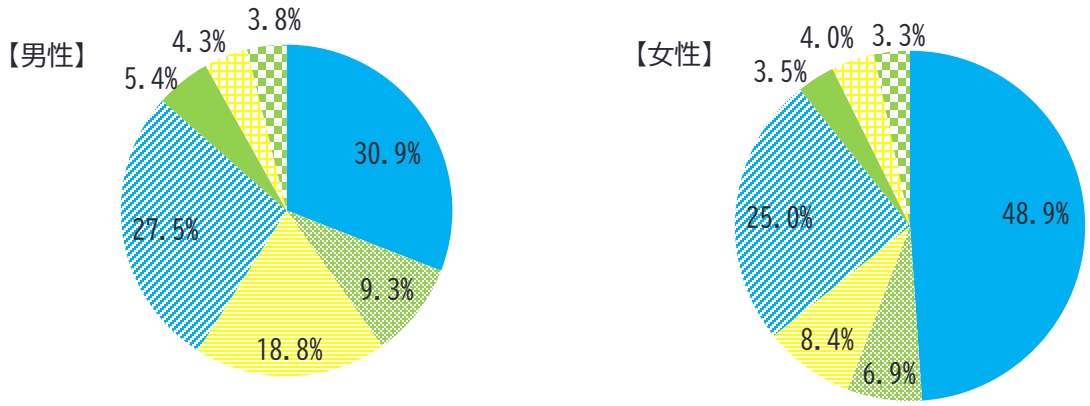


１　高齢者孤立死の発生件数
　【平均値】男性　２８１人　女性　１２８人　　男性は女性の**２．２倍**

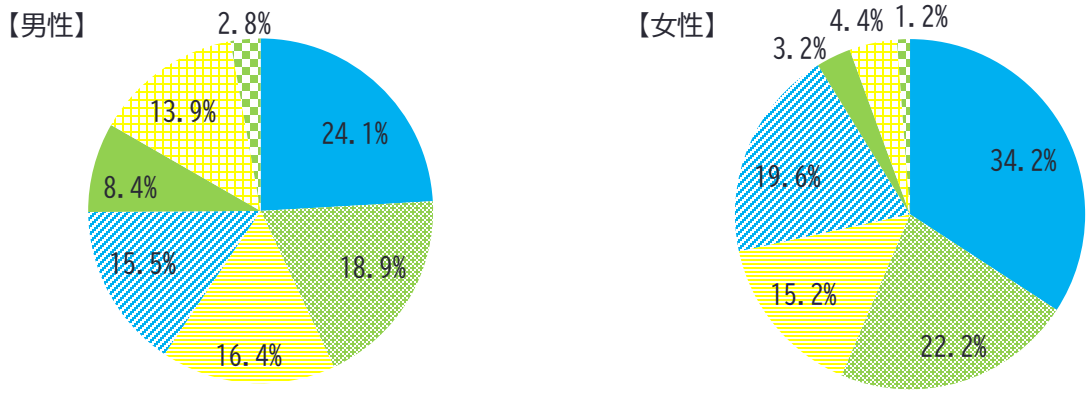
２　高齢者孤立死における死後経過日数
　【平均値】男性１４．６日　女性　８．４日　　男性は女性の**１．７倍**
　【中央値】男性　５．０日　女性　２．０日　　男性は女性の**２．５倍**

5　性別・年齢別の集計
（２）性別による傾向（死後経過日数と発見者の比較）

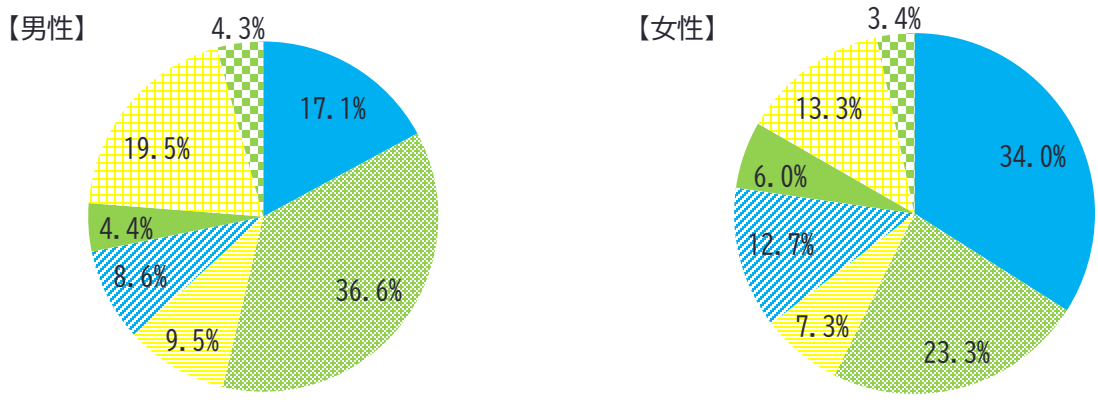
死後３日以内に発見された時の発見者の割合



死後４～７日以内に発見された時の発見者の割合



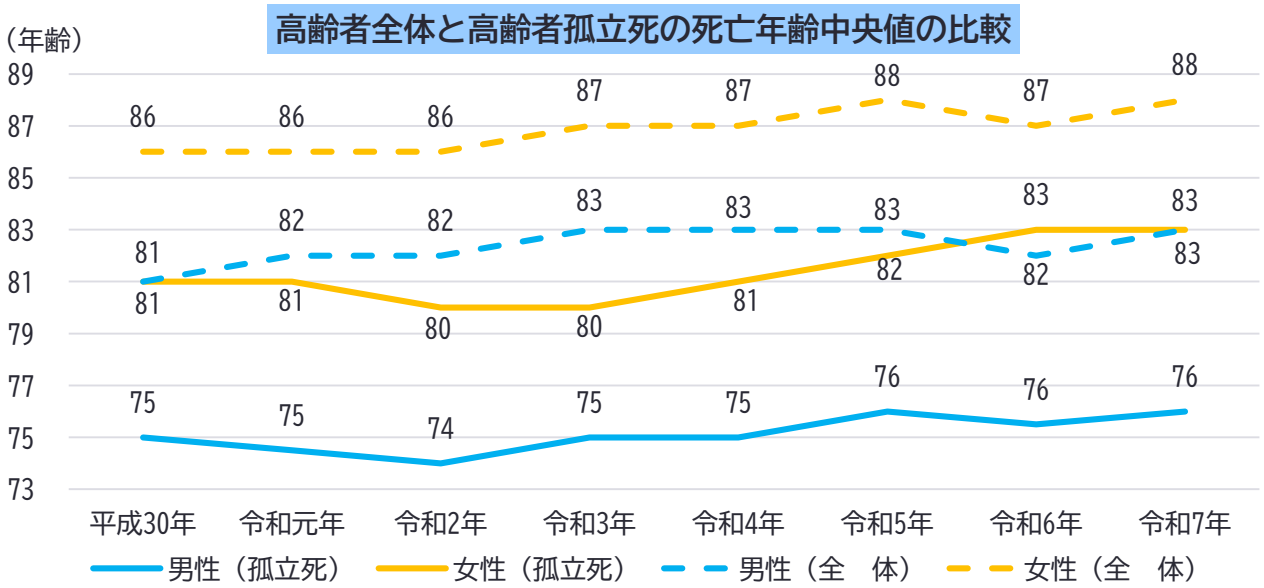
死後８～３０日以内に発見された時の発見者の割合



１　男性・女性ともに**家族親族**の発見割合が**高く**、**女性は常に３割以上**が家族親族が発見者となっており、女性の方が男性より発見割合が高い。
２　発見までに時間がかかるほど、**隣人**及び**管理人**の発見割合が**高まる**。

5　性別・年齢別の集計
（３）死亡年齢と死後経過日数の比較

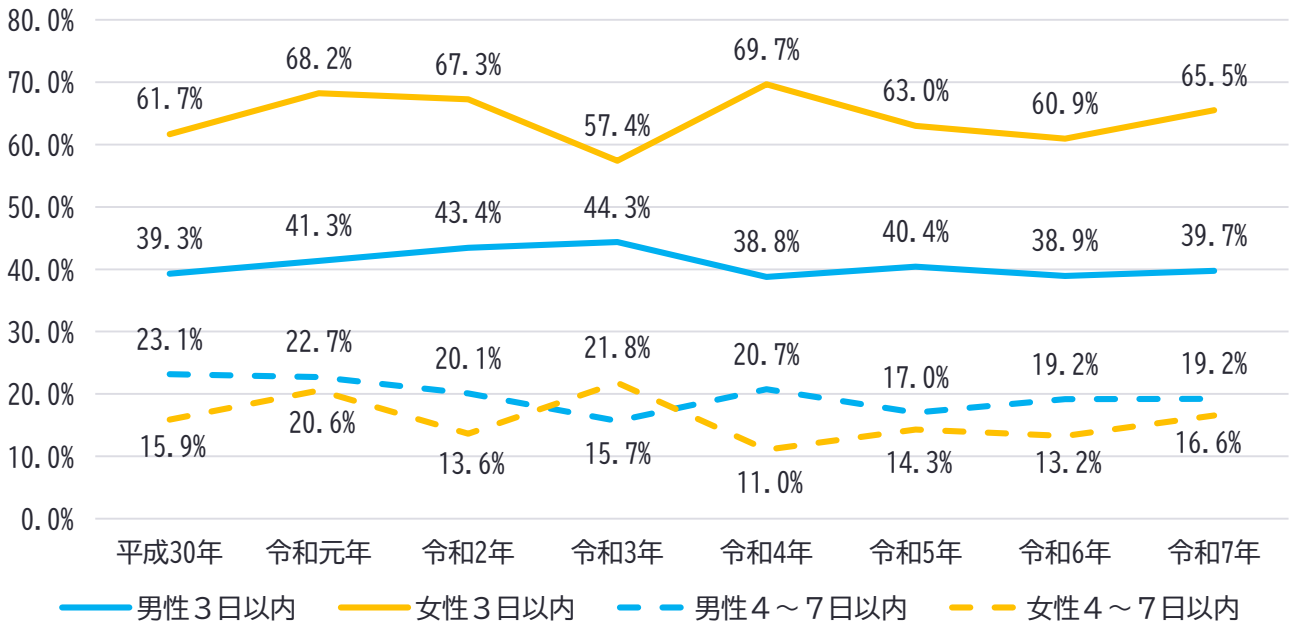
高齢者全体と高齢者孤立死の死亡年齢中央値の比較



種別	孤立死		全　体	
性別	男性	女性	男性	女性
Ｈ３０～Ｒ７の平均	７５．８歳	８１．０歳	８２．１歳	８６．３歳
Ｈ３０～Ｒ７の中央値	７５．１歳	８１．４歳	８２．４歳	８６．９歳

高齢者孤立死した方の死後経過日数の比較

※　死後経過日数とは、東京都監察医務院における死亡日と検案日の差である。



1　高齢者全体の死亡年齢の中央値と比較すると、孤立死した方は男性で**７．３歳**、女性で**５．５歳**早く亡くなっている。
2　女性は死後３日以内に発見される方が**約６割半**だが、男性は**約４割**に留まっている。